

## 学習基本調査の特徴

学習基本調査は、「①学習に関する意識・実態調査(アンケート調査)」と「②学力調査」、「③都市間国際比較調査」の3種類からなっている。①は第1回(1990年)、第2回(1996年)、第3回(2001年)、第4回(2006年)と、ほぼ同一の小学校、中学校、高校を中心にご協力いただき実施した。②は①の対象となった小学校、中学校を対象に第3回、第4回で実施し、③はアジアと欧米の大都市の児童に対して、はじめて実施した。

学習基本調査の特徴は以下のようにまとめられる。

### 1. 時代による変化を把握することができる

「①学習に関する意識・実態調査」は、時系列的に調査することを目的として企画した。そのため調査項目は、時代や教育環境の変化に応じて多少の追加・削除はあるものの、ほぼ同一の項目を使用している。本報告書では1990年から2006年までの16年間で子どもたちの意識・実態がどのように変化したかという視点で分析を行っている。

調査対象は、大都市、地方都市、郡部の3地域の公立校から選定し、地域による違いがみられるようにしている。また対象学年は、小学校5年生、中学校2年生、高校2年生を選んでいる。高校に関しては、普通科を対象とし、進学状況による違いがみられる学校群を選定している。調査対象校は、4回の調査ともほぼ同一で、時系列的な変化を把握することができる。

### 2. 小学生、中学生、高校生の学習実態の比較ができる

「①学習に関する意識・実態調査」は、小学生、中学生、高校生という学校段階の違いがみられるよう、共通の質問項目を設定している。学校段階による違いを一部抜粋したもの(『第4回 学習基本調査 国内調査・速報版』)をBenesse教育研究開発センターのウェブサイト(<http://benesse.jp/berd/>)に掲載している。

報告書は、小学生版、中学生版、高校生版の3冊に分かれている。

### 3. 学力の実態を把握することができる

「②学力調査」は、実際の学力の状況を把握するために、小学生、中学生に対して算数・数学と国語のテストを行っている。学習指導要領に沿った知識・理解を測定する問題と、知識・技能を日常生活や問題解決の場面で活用する力を測定する問題を作成し、「①学習に関する意識・実態調査」の対象となった児童・生徒の一部に調査を行った。

※この結果と分析は2007年夏頃に報告予定。

### 4. 意識・実態と学力の関係を明らかにできる

「①学習に関する意識・実態調査」と「②学力調査」の両方のデータから、意識・実態と学力がどのような関係にあるかを明らかにする。

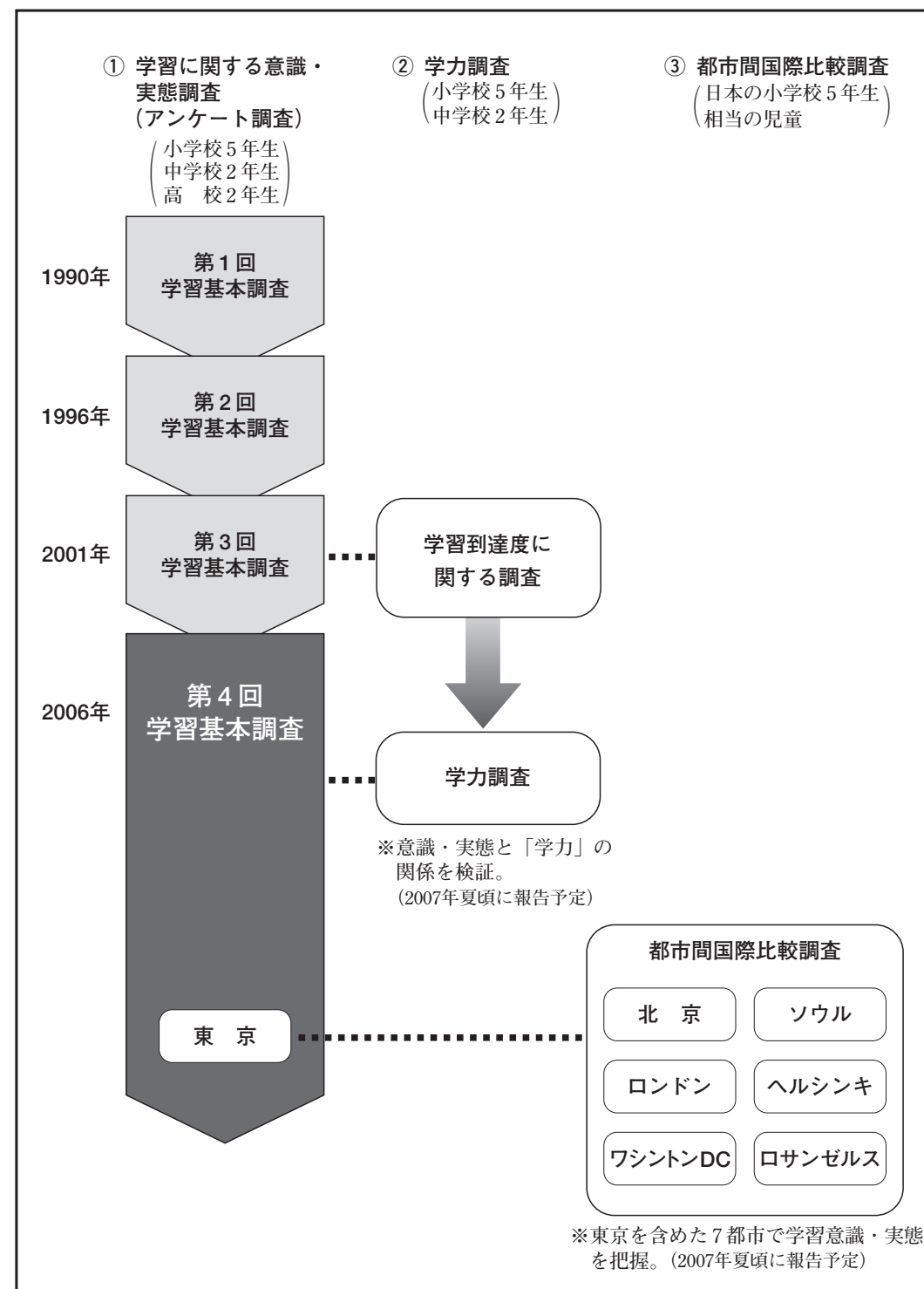
※この結果と分析は2007年夏頃に報告予定。

### 5. 国際比較により児童の学習意識・実態の違いを把握することができる

「③都市間国際比較調査」は、アジアと欧米の5か国6都市と日本(東京)の児童の学習意識・実態の違いを把握することを目的として調査を行っている。調査対象は日本の小学校5年生相当の児童とし、調査項目は各国の教育課程や教育事情を考慮して多少の追加・削除をしているが、ほぼ同一の項目を用い、各都市間での違いがみられるように配慮している。

※この結果と分析は2007年夏頃に報告予定。

## 学習基本調査の枠組み



## 学習に関する意識・実態調査の概要

### ●調査テーマ

高校生の学習に関する意識・実態調査

### ●調査方法

学校通しの質問紙による自記式調査

### ●調査時期

2006年6～7月

### ●調査対象

全国4地域〔東京都内、および東北、四国、九州地方の都市部と郡部〕の普通科高校2年生  
4,464名

※第1回(1990年)2,005名、第2回(1996年)2,615名、第3回(2001年)3,808名

### ●調査項目

好きな教科／授業の理解度／家庭学習の時間・内容・様子／学習の方法／日常生活の中での「学習」／授業の受け方／好きな学校の勉強方法／学習塾・予備校の利用／諸学習機会の利用／学習していて感じる事／成績の自己評価／学習上の悩み／成績観・学力観／社会観・価値観／進路・進学意識／将来つきたい職業／部活動の参加状況／心や身体の疲れ／メディアの利用／家庭環境

※調査テーマ、方法、対象(調査校)、項目は、第1回～第3回調査とほぼ同じ。ただし、調査項目は時代の変化に合わせて、多少追加・削除している。

※本調査は、地域や学校ランクによる違いをみるために、普通科高校から有意抽出した高校を対象とし、また時系列的比較を可能とするため、各回ほぼ同一の対象に調査を依頼している。そのため、数値は全国高校生の代表値ではない。

※本報告書で使用している百分比(%)は、有効回答数のうち、その設問に該当する回答者を母数として算出し、小数点第2位を四捨五入して表示した。四捨五入の結果、数値の和が100にならない場合がある。また、数値表記のしかたによって、第1回の数値がこれまでの報告書に掲載した数値から0.1ポイント前後している場合がある。

※本文中での成績の「上位」「中位」「下位」とは、9A。「現在の総合的な成績は、学年の中でどのくらいですか」という質問に対し、自己評価によって「1(上のほう)」～「3」と回答した生徒を「上位」、「4(真ん中)」を「中位」、「5」～「7(下のほう)」を「下位」とした。

### 有効回答数

(名)

	性別			学校の平均偏差値帯別				合計
	男子	女子	無回答・不明	55以上	50以上 55未満	45以上 50未満	45未満	
東京都内	661	705	10	307	616	0	453	1,376
地方都市(東北・四国・九州地方)	928	914	10	992	289	0	571	1,852
郡部(東北・四国・九州地方)	579	650	7	294	0	416	526	1,236
合計	2,168	2,269	27	1,593	905	416	1,550	4,464

※学校の平均偏差値は弊社「進研模試」のデータを使用(一部推定)。各サンプルは55以上6校、50以上55未満3校、45以上50未満2校、45未満8校。

## 第2章の要約

### ■第1節 高校生の学習行動

#### 1. 学校での学習の様子

##### ①好きな教科

高校生が好きな教科のベスト・スリーは、「体育」69.9%、「音楽」46.9%、「国語」45.1%である。逆にワースト・スリーは「公民」25.8%、「総合的な学習の時間」27.1%、「美術」36.8%である。時系列的にみると、「国語」「理科」「体育」の3教科で「好き」とする回答が第1回以降、増加している(図2-1-1、表2-1-1、2、3)。

##### ②授業の理解度

授業の理解度の高い順に並べると、「国語」47.2%、「数学」「英語」39.3%、「地歴」38.2%、「理科」36.2%、「公民」24.6%となる。時系列的にみると「地歴」を除き、授業の理解度に上昇傾向がみられる(図2-1-2、表2-1-4、5、6)。

##### ③文理のコース

現在のコース選択は、「文系」46.7%、「理系」38.2%、「どちらでもない・未定」14.5%という状況である。男子で、また学校の偏差値の高い学校群ほど、「理系」の比率が高くなる傾向がみられる(図2-1-3、4)。

##### ④高校3年間で履修する予定の科目

科目によって履修(予定)率の差は大きく、半数を切っているのは、「地理」「数学Ⅲ」「倫理」「物理」「政治・経済」「地学」である(表2-1-7)。

##### ⑤授業の受け方

時系列的にみると、授業態度の積極化と授業中の逸脱行為の増加という相反する傾向がみられる。「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」は第1回から一貫して増加している(第1回27.6%→第4回43.5%)一方、第3回まで減少傾向にあった「内職(他の科目の勉強など)をする」(第3回39.1%→第4回46.0%)、「近くの人とおしゃべりをする」(第3回38.1%→第4回45.4%)は増加に転じている(図2-1-5、表2-1-8、9)。

##### ⑥好きな学校の勉強方法

高校生が好む勉強方法(授業のタイプ)ベスト・スリーは、「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」(82.9%)、「友だちと話し合いながら進めていく授業」(60.7%)、「ドリルやプリントを使ってする授業」(55.7%)である。第3回と比べ「パソコンを使ってする勉強」が増加している一方で、「いろいろな人に聞きに行っている授業や調査」「考えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表すること」は減少している(図2-1-6、表2-1-10、11)。

## 2. 家での学習の様子

### ① 家庭学習の頻度

「ほとんど毎日する(週に6～7日)」(22.5%)は前回まで減少傾向にあったものの下げ止まった一方で、「家ではほとんど勉強しない」と答えた高校生は引き続き増加傾向がみられ、第1回の17.3%から27.9%に推移している。高校生の家庭学習からの離脱はさらに進行しているようだ(図2-1-7、8)。

### ② 学校外での学習時間

「ほとんどしない」と「およそ30分」を合わせると39.5%となり、およそ4割が多くても30分くらいしか勉強していないことがわかる。学校の偏差値帯別に学習の平均時間をみると、偏差値55以上の学校群で105.1分、50以上55未満は60.3分、45以上50未満は62.0分、45未満は43.2分と、偏差値55以上と45未満の学校群では約1時間の差がある(図2-1-9、10、11、表2-1-12)。

### ③ テスト勉強の開始時期

テスト勉強の開始時期は「1週間くらい前から」が36.4%と一番多く、次に「10日くらい前から」16.8%が続く。1週間くらい前に始めるのが一般的であるようだ。また、偏差値55以上の学校群ではテストへの準備が早いのに対し、45未満の学校群では準備が遅いようだ(図2-1-12、13)。

### ④ 家での学習内容

家での学習内容の中心になっているのは、「学校の宿題」86.4%および「学校の授業の予習」56.5%である。また、復習よりも予習中心の傾向にある。学校の偏差値帯別にみると、「学校の宿題」以外の項目では学校群によって大きな差がみられ、偏差値が高い学校群の高校生ほど宿題以外の学習にもより多く取り組んでいる(表2-1-13、14)。

### ⑤ 家での学習の様子

「出された宿題をきちんとやっていく」(81.8%)を筆頭に、家での学習態度について肯定的な回答が目立つ。一方で、ほとんどの項目において学校の偏差値帯による顕著な差異がみられ、学習態度の二極化の問題が懸念される(図2-1-14、表2-1-15)。

### ⑥ 日常生活の中での「学習」

日常生活の中での「学習」で、もっとも多いのは「読みたい本を本屋で探して買う」61.0%で、つづいて「文学作品や小説・物語を読む」の52.7%である。一方で、「美術館や博物館に行く」「自然や動物・植物の本を読む」は1割程度と少ない(図2-1-15、表2-1-16)。

### ⑦ 家庭環境

親の高学歴化が進んでいる。「親は私にいい大学に行くことを期待している」「ほとんど毎日、親は私に『勉強しなさい』と言う」といった、親からの学歴期待や勉強へのプレッシャーについては、男子のほうが強く感じている(表2-1-17、18)。

## 3. 学校外の学習機会

### ① 学習塾・予備校の利用

放課後や日曜日に学習塾、予備校に通っているのは、時系列でみると第1回から一貫して増加しており、第4回では25.3%と4人に1人が利用している結果となった。塾の種類は「進学塾」がほぼ5割、「補習塾」が4割程度である。また週あたりの通塾日数は「2日」が38.8%ともっとも多く、8割ほどが3日以内となっている(図2-1-16、17、表2-1-19、20、21)。

### ② 諸学習機会の利用

「今年の夏休みに、学校が行う補習授業を受ける予定だ」が38.8%ともっとも比率が高いものの、時系列でみると第1回から着実に減少している。また「学校で朝や放課後の補習授業を受けている」も同様に減少傾向にある。逆に第1回から増加傾向にあるのが「今年の夏休みに、塾や予備校の夏期講習に行く予定だ」であり、第4回では18.7%とほぼ2割を占める(図2-1-18、表2-1-22)。

## 4. 学習の方法

### ① 学習の方法

第1回と比較して、「辞書(英語・国語など)を引く」と回答した比率が75.8%から54.2%へと20ポイント以上減少した。もっとも増加したのは、「教科書やテキストをくり返し読む」(47.7%→67.1%)で、教科書中心の学習をする傾向が強まっている。性別では、女子がまじめに学習している様子がわかる(図2-1-19、20、21)。

### ② 学習方法のタイプ

学習方法のタイプについては、「学校で使う教材中心」(92.9%)、「自分で整理しながら勉強する」(87.1%)、「試験の前にまとめて勉強する」(82.5%)などを選択する比率が高い。また、高い偏差値帯の学校群の高校生は、「考える」機会を多く持っていることがわかる(図2-1-22、23、24)。

### ③ メディアの利用

「家でパソコンを使う」のは71.2%、「学校でパソコンを使う」のは31.5%であり、10年前と比較して大きく増加した。「家でインターネットを使って何か調べる」高校生も、約7割に達する(図2-1-25)。

## ■第2節 高校生の学習観・成績観・社会観

### 1. 成績観

#### ① 成績の自己評価

成績の自己評価は、第1回から第4回にかけて「下位」の比率が高まっている。また教科別では「数学」「英語」に関して、半数近くが「下位」と自己評価している(図2-2-1、2、3)。

#### ② とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績

とりたいと思う成績は、「上位」にほぼ9割が集中する一方、真ん中から下の成績でよいと答えた高校生は約1割にとどまり、「よい成績をとりたい」という意欲は高いといえる。またがんばればとれると思う成績では、8割以上の高校生が「上位」をとれると考えている(図2-2-4、表2-2-1、2、3)。

#### ③ 成績観・学力観

時系列でみると「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい(名門大学志向)」が第1回から一貫して高く、第4回ではほぼ6割を占める。一方で第2回では56.2%で突出していた「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい(ふつうの生活志向)」は、第3回でいったん10ポイント程度減少したものの、今回は48.6%にまで増加している。これは偏差値45未満の学校群での比率が高いことが影響している(図2-2-5、表2-2-4)。

### 2. 学習していて感じること

6～7割の高校生が、社会や自然について「すばらしい」「ふしぎだな」と感じるが、それらについて自ら調べたり考えたりするのは4～5割にとどまる。男子は社会や自然のしくみ、女子は他者とのコミュニケーションへの関心が高い(図2-2-6、7)。

### 3. 学習上の悩み

学習上の悩みのトップ・ツーは、「上手な勉強の仕方がわからない」66.7%、「どうしても好きになれない科目がある」64.9%で、いずれも第1回から数ポイントほど漸増している(図2-2-8、9、10、11)。

### 4. 進路・進学意識

#### ① 受験と希望する進学段階

高校生は7割強が「四年制大学まで」「大学院まで」の進学を希望している。具体的には、「四年制大学まで」66.0%、「大学院まで」10.6%、「専門学校・各種学校まで」13.1%、「高校まで」4.0%、「短期大学まで」3.9%と続く。時系列的にみると、(1)四年制大学の微減、(2)はじめて1割に達した大学院進学希望者、(3)専門学校・各種学校の着実な増加、(4)短期大学の伸び悩みがみられる(図2-2-12、13)。

#### ② 希望する大学のタイプ

希望する大学は「それ以外の(難関ではない)国公立大学」46.4%がもっとも多く、これに「難関の国公立大学」の30.4%、「それ以外の(難関ではない)私立大学」11.6%、「難関の私立大学」6.9%が続く。全体的に国公立大学進学希望が優勢で、その傾向は、偏差値55以上の学校群と45以上50未満の学校群で強い。45未満の学校群では逆に、国公立大学進学希望が減少し、私立大学進学希望者が増加に転じている(第3回25.4%→第4回36.6%)(図2-2-14、15)。

#### ③ 希望する入試方法

希望する入試方法は、57.4%が「できれば一般入試で」、40.4%が「できれば推薦入試やAO入試で」と回答しているが、この傾向は第3回と変わらない。偏差値が低い学校群ほど推薦入試やAO入試を希望する比率が高い(偏差値45未満66.0%>45以上50未満64.0%>50以上55未満34.3%>55以上26.3%)(図2-2-16)。

#### ④ 将来つきたい職業

将来つきたい職業名を具体的に書いてもらったところ、男女ともにもっとも多いのは、「学校の先生」であった(男子8.9%、女子8.2%)。つづいて、男子は「公務員」「研究者・大学教員」「医師」「薬剤師」「法律家」、女子では、「保育士・幼稚園の先生」「看護師」「薬剤師」「医師」となっている。資格や技能をもとに安定した職業を希望している(表2-2-5)。

### 5. 社会観・価値観

7割以上の高校生にとって学校の勉強は、「一流の会社に入るために」「会社や役所に入ってえらくなる(出世する)ために」など、「職業的な成功、地位の達成」の手段としてとらえられている。つづいて、「社会で役に立つ人になるために」「心にゆとりがある幸せな生活を送るために」など、実用面ではない効用もそれぞれ5割以上の高校生が信じている。幸福をもたらす要因は、小学生、中学生同様に、高校生でも「いい友だち」(96.3%)であった。時間選好については、「将来優先」「現在優先」の間に全体として差異はないものの、性別や学校の偏差値帯とは関連がみられた(図2-2-17、18、19、20、21)。

### 6. 部活動の参加状況

もっとも多いのは「運動部に入って積極的に参加している」の51.1%である。そして、「入っていない」の20.2%、「文化部に入って積極的に参加している」の18.1%が続いている(図2-2-22、表2-2-6)。

### 7. 心や身体の疲れ

もっとも多い「あくびがでる」89.9%から、「だるい」85.8%、「目が疲れやすい」77.9%、「朝、なかなか起きられない」76.5%、「あきっぽい」75.3%と続き、もっとも低い「いらいらする」でも68.9%と、多くの高校生が疲れている(図2-2-23、24、25)。